

MAY. 5  
2026

No.620



# おきぎん 調査月報



くがにくとよば【黄金言葉】 vol.259

誰にでも開かれた場所であり続けたい

株式会社クランク 代表取締役 中江 裕司  
取締役/興行部部長 下地 久美子

シリーズ日本経済

デフレの罫からの解放

東京大学 名誉教授  
(株式会社おきぎん経済研究所アドバイザー) 伊藤 元重

おきぎんマーケティングレポート

第103回おきぎん企業動向調査  
(2026年1～3月期) 調査結果

- 1 **くがにくとぅば[黄金言葉] vol.259**  
**誰にでも開かれた場所であり続けたい**  
株式会社クランク 代表取締役 中江 裕司  
取締役/興行部部長 下地 久美子

- 6 **シリーズ日本経済**  
**デフレの罨からの解放**  
東京大学 名誉教授  
(株式会社おきぎん経済研究所アドバイザー) 伊藤 元重

- 10 **おきぎんマーケティングレポート**  
**第103回おきぎん企業動向調査**  
**(2026年1～3月期) 調査結果**

- 20 **けいざい風水**

- 22 **県内景況・確報**  
2026年2月の県内景況

- 30 **国内景気動向**

- 32 **沖縄マーケティング情報**  
①沖縄県内の事業所数・従業者数・人口・世帯数  
②世界の中の沖縄(年次)  
③グラフでみる沖縄経済  
④数値でみる沖縄県・全国の経済動向(月次)



表紙写真/万座毛

## 誰にでも開かれた場所であり続けたい



株式会社 クランク

代表取締役 中江 裕司

取締役／興行部部長 下地 久美子



那覇市牧志にある桜坂劇場は、映画上映にとどまらず、ライブや演劇、ワークショップ、カフェなどを通して多様な文化に触れられる場として親しまれています。その運営を担うのが、株式会社クランクです。今回は、取締役の下地久美子氏に、桜坂劇場の歩みや「劇場」という場に込めた思い、今後の展望などについてお話を伺いました。

### 誰にでも開かれた場所

株式会社クランクは、2005年に設立し、桜坂劇場の運営を行っています。事業内容としては、映画の上映が中心にありますが、それだけではありません。音楽ライブや演劇、トークイベントなどの開催に加え、カフェ「さんご座」、ショップ「ふくら舎」、ワークショップ「桜坂市民大学」の運営も行っています。ひとつの建物の中で、映画だけでなく、さまざまな文化に触れていただける場所づくりを行ってきました。

桜坂劇場を運営するうえで私たちが最も大切にしているのは、「誰にでも開かれた場所であること」です。映画館というと、映画を観る人だけが入る場所だと思われがちですが、私たちはそうではないと考えています。映画を観なくても、チラシを見に来るだけでもいい。カフェで一息つくだけでもいい。ショップで本や器を眺めたり、面白いものに出会えそうだと思う立ち寄りだけでも構わない。特別な目的がなくても、ふらりと入って来られる場所でありたいと思っています。そのため、空間の作り方にもそうした考えを反映してきました。お客様が過ごせる場所として、開かれた印象になるよう工夫し、ここは自分が入ってもいい場

所なのだろうかと感じさせない場であることを大事にしてきました。映画が好きな方はもちろん、まだ映画館に慣れていない方や、何か面白いものに出会いたいと思っている方にも、自然に足を運んでいただける場所を目指しています。

### 桜坂劇場の始まり

現在の桜坂劇場は、もともと「桜坂シネコン 琉映」として営業していた施設を引き継ぐ形で始まりました。かつて那覇の街中には、映画館がいくつもありました。国際通り周辺にもそれぞれ個性のある映画館があり、映画を観ることが街へ出る理由のひとつになっていた時代がありました。しかし、同一の施設に複数のスクリーンがある郊外型の大型シネマコンプレック



スの広がりやDVDなどの映像ソフトの普及などにより、中心市街地の映画館は次第に閉館していきま。そうした流れの中で、桜坂シネコン琉映もまた転機を迎えました。

従来形のままで継続が難しい。それでも、街から映画館をなくしてはいけないのではないか。そうした思いの中で、新しい形でこの場所を引き継ぐことになり、桜坂劇場が始まりました。さらにこの場所の歴史をたどると、1952年に芝居小屋「珊瑚座」として始まったことに行き着きます。芝居小屋として生まれ、映画の上映の場となり、そして現在は映画だけにとどまらない複合的な文化の場となっている。姿は時代とともに変わってきましたが、ここが長く娯楽を届けてきた場所であることは変わりません。私たちは、そうした歴史の積み重ねの上に、今この場所を預らせていただいています。

## 「劇場」という名前

私たちが敢えて「映画館」ではなく、「桜坂劇場」と名乗っているのには理由があります。映画館という言葉には、映画を上映する場所という意味が強くあります。もちろん映画上映は今も事業の中心ですが、私たちがつくりたいのは、それだけの場ではありません。桜坂劇場では、映画だけでなく、音楽ライブや演劇、トークイベントも行っています。映画を観に来た方が、帰りに本を手にとることもあれば、カフェに立ち寄って次に観たい作品に出会うこともある。あるいは、講座を受けに来た方が、館内に並ぶ映画のポスターを見て別の日にまた来てくださることもあるかもしれません。そうした、文化がゆるやかに交差する場所にしたいという想いを込めて、「劇場」という名前を使っています。もともと、映画だけをやってきた館が厳しくなっていく中で、この場所を残していくためにも、映画だけではないあり方が必要でした。それは単なる経営上の工夫ということだけではなく、この場所が街の中でどういう存在であるべきかを考えた時に、自然にたどり着いた形でもあったと思います。映画を観るためだけの場所ではなく、何か面白いことがありそうだと

思ってもらえる場所であること。それが桜坂劇場という名前に込めている想いです。

## 知的好奇心を楽しむための学びの場「桜坂市民大学」

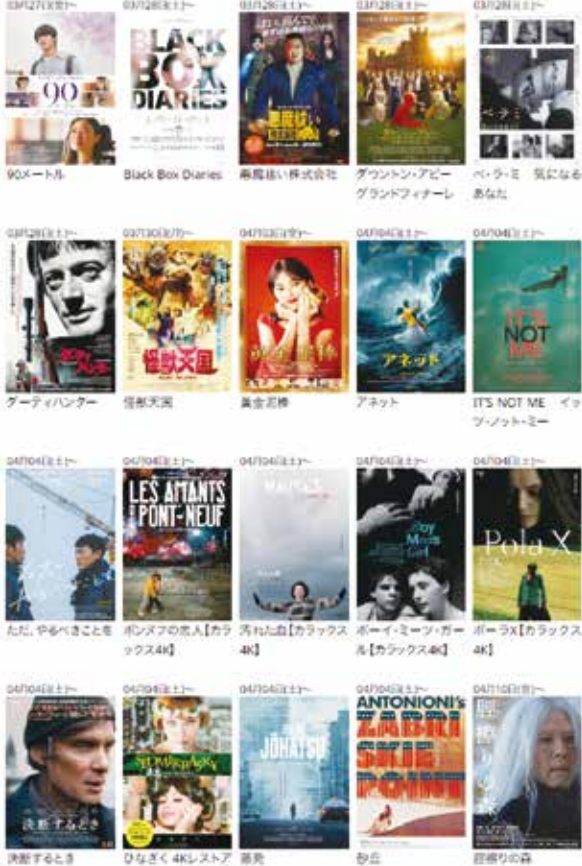
ワークショップ「桜坂市民大学」は、私たちにとって欠かせない柱です。劇場を立ち上げた当初から、ワークショップを組み込んだ場になりたいという考えがありました。最初は数少ない講座から始まりましたが、その後「桜坂市民大学」という名前を付け、講座数も増やしながら現在の形になっていきました。文学や歴史、語学、コーヒー、手芸、身体を動かすものまで、その内容は幅広いです。資格取得のための学びというより、知的好奇心を楽しむための学びの場に近いです。勉強というと構えてしまう方もいますが、面白いから学ぶ、知らなかったことを知るの楽しいから通う、そのような感覚を大切にしています。



## お客様にとって、観たいと思っていた作品を

桜坂劇場では、上映作品の編成については基本的に私が担っています。ただし、私個人の趣味だけで決めているわけではありません。自分の好みだけで選んでしまえば、どうしても偏りが出てしまいます。そうではなく、桜坂劇場に来てくださる色々なお客様にとって、「自分が観たいと思っていた作品をここでやってくれた」と思っただけのことを大事にしています。そのため、できるだけ多くの作品情報を集め、どのタイミングなら上映できるのか、どの作品を今届けるべきかを考えながら編成しています。収益を考えることももちろん必要です。劇場を続けていく以上、経営として成り立たせなければなりません。ただ、収益が見込める作品だけを並べるのではなく、埋もれてしまいそうな作品や、沖縄では上映されにくい作品も含めて紹介していきたいと思っています。恋愛映画もあれば、ホラーもあり、社会派の作品もある。できる限り一色にならず、幅広いラインナップを心がけています。

### 上映予定作品



## 「日常に寄り添える場」を届ける

今後の展望として、一番大きいのは、この場所を次の世代にどう引き継いでいくかということです。珊瑚座の時代から数えれば、この場所は長いあいだ人々に娯楽を届けてきました。私たちはその歴史の途中を預かっているにすぎません。だからこそ、自分たちの代で終わらせるのではなく、次の世代がまた新しい形でこの場所を育てていけるようにしなければなりません。そのためには、まず続けていくことが必要であり、続けるためには、この場所を通して人と文化をつなぎ続けなければならないと考えています。映画監督や作家、講師、クラフト作家など、ものをつくる人たちと出会い、その方々の表現や仕事をお客様につなげていく。そうした役割を、これからも丁寧に果たしていきたいと思っています。また、桜坂劇場にとって最も大切なお客様は、やはり沖縄に住んでいる方々です。観光客の方にも来ていただいています。まずはこの地域で暮らす人たちにとってなくてはならない場所になりたいと思っています。沖縄でこの場所を運営させてもらっているからこそ、沖縄に対する恩返しのようなこともしていけたらと思っています。



映画館でもあり、劇場でもあり、学びの場でもあり、街の居場所でもある。そのどれか一つではなく、いくつもの役割を持ちながら、誰にでも開かれた場所であり続けたいと思っています。これからも、映画をはじめとする様々な文化の入口として、そして沖縄で暮らす人たちの日常に寄り添える場所として、この劇場を守り育てていきたいと思っています。

第98回  
**アカデミー賞 最有力!**  
脚本賞・国際長編映画賞 2部門ノミネート!



第78回  
**カンヌ国際映画祭**  
パルムドール(最高賞)受賞

これほど素晴らしい映画を  
見たことがない

**マーティン・スコセッシ** (監督)

力強いサスペンス、  
今年必見の映画

**THE NEW YORKER**

# IT WAS JUST AN ACCIDENT

## シンプル・アクシデント | 偶然

イランの巨匠 ジャファール・パナヒ監督

出演: フヒド・モバシエリ、マルヤム・アフシャリ、エブラヒム・アジジ

ハディス・バクバテン、マシッド・パナヒ、モハマッド・アリ・エリヤスメール

原題: Un simple accident / 2025年、フランス・イラン・ルクセンブルグ、イベルシナ協、1.85:1、5.1ch、103分

日本語字幕: 大西公子、字幕監修: ショーラン・ゴルバリアン、配給: セントラ・インターナショナル、協力: ユニフランス UNIFRANCE

[simpleaccident.com](http://simpleaccident.com)

偶然の事故を引き金に出会った、不当に投獄された過去を持つ男女。  
(報復殺人)の行き着く先は—— ユーモアとスリルに満ちた、サスペンスの最高峰

あの男、本当に復讐相手?

# イランの今を生きる 人々の物語



偶然の事故を引き金に出会った、不当に投獄された過去を持つ男女。  
(報復殺人)の行き着く先は—— ユーモアとスリルに満ちた、サスペンスの最高峰

**5/8(金) 桜坂劇場にて公開**



## デフレの罠からの解放



伊藤 元重

東京大学 名誉教授  
(株式会社おきぎん経済研究所アドバイザー)

### 30年近く続いたデフレからの脱却

今世紀の初めから20年以上、日本経済はデフレの状態にどっぷりと浸かっていた。物価や賃金は上昇しないどころか、時には下がることもあった。金利はほぼゼロの近くに張り付いていた。消費や投資などの需要は伸びず、景況感が悪い状態が続いた。ただ、政府や銀行の支援のおかげもあって、倒産件数は意外と少なかった。

停滞と安定の時代。日本経済がデフレを経験した時期を名付けるとすれば、この言葉が適切だろう。経済は停滞していたが、低位安定とも言えるような閉塞状況にあった。それが、数年前から経済状況は大きく変わってきた。一言で言えばデフレからインフレへの変化であるが、その結果として様々なものが変化した。

物価や賃金は上昇を続けている。金利も確実に上昇している。人手不足や原材料費の高騰などで倒産する企業も増えてはいるものの、失業率は低位安定している。景気は全体としては決して悪くはない。デフレを停滞と安定の時代と呼ぶとすれば、インフレは変化と不確実性の時代と呼ぶのがよいだろう。企業にとってみれば良い方向にも悪い方向にも変化は大きく、リスクも増えているがチャンスも大きくなっている。

デフレの時代には、多くの企業がデフレマインドにどっぷりと浸かっていた。そうしたデフレマインドによって景気がさらに悪くなることを、デフレの罠と言う。20年以上もデフレが続いたことで、日本中がデフレの罠に落ち込んでいた。今、デフレの時代が終わる中で、我々はデフレの罠を払拭しなくてはならない。

そこに、経済を活性化させる道が開けるからだ。

### マイナスの実質金利

インフレに移行する中でデフレの罨からの解放が始まった。その一つの流れが金利の動きだ。インフレの中で金利は上昇している。銀行のローンも社債の利回りも上昇している。ただ、これは名目金利の動きである。経済の実体を動かすのは、名目金利ではなく実質金利であることに注意しなくてはならない。

例えば、デフレ時代に1%であった金利が2%まで上がったとしてみよう。ただ、デフレ時代には物価上昇率が0%であったのが、インフレで物価上昇率は3%にまで上がったとしてみよう。実質金利とは名目金利から物価上昇率を引いたものである。デフレの時代には、名目金利は1%で物価上昇率は0%であるので、実質金利は1%である。インフレで名目金利は2%になったが、物価上昇率が3%であれば、実質金利はマイナス1%ということになる。

つまり物価上昇率が上昇を続ける中で、日本の実質金利はマイナス金利となっているのだ。実質金利がマイナスになることは、デフレの時代には絶対に起こらなかった。株価や企業の投資行動などに影響を及ぼすのは名目金利ではなく、実質金利である。デフレの時代には実質金利が十分に下がらず、景気にも好ましくない影響を及ぼしていた。つまり、デフレの罨が働いていたのだ。

この数年、物価が上がり続け、物価上昇率の方が名目金利よりも高い状態が続いている。実質金利がマイナスになって

いるのだ。だから、株価や不動産価格が好調であったわけだし、企業の投資活動も活発であった。株価は色々な要因に影響を受けるものであり、実質金利だけで決まるわけでもない。それでも30年ぶりの低い実質金利が株価を押し上げていることは間違いない。

企業にとっても、実質金利がどうなっているのか注意することは重要だ。ローンの金利が上がっているように見えても、それ以上に物価が上がっていけば、そこに投資のチャンスがあるからだ。

もっとも、実質金利がマイナスの状態がずっと続くわけではない。名目金利がさらに上昇したり、物価上昇率が下がってくれば、名目金利の方が物価上昇率よりも高くなるかもしれない。つまり実質金利が反転してプラスになることもある。こうした動きには注意が必要だ。

### インフレは財政政策にはフォローの風

インフレの流れでデフレの罨からの解放が起きているもう一つの重要な点は財政政策の分野での動きだ。デフレは財政運営にはアゲインストとなる。物価や賃金が上昇しないので税収は伸びない。その結果、財政収支は赤字傾向が続く。

政府の財政運営で重要な指標となるのが、公的債務をGDPで割った債務/GDP比である。日本の債務は1,200兆円近くある。GDPは600兆円前後であるので、債務/GDP比は200%前後となる。世界でも有数に高い債務/GDP比である。この債務/GDP比はデフレの中ではなかなか減少しない。分母のGDPが増えていかないからだ。実際、長引くデフレの中で日本の債務/GDP比は増え

ていくばかりであった。

こうした流れがインフレによって大きく変わってきた。物価や賃金が高くなることで政府の税収は増え始めている。歳出を増やす余裕が出てきたのだ。それに加えて、インフレの結果名目GDPが増えているので、債務/GDP比の拡大は止まり、減少する傾向さえ示している。

インフレによって財政運営に少し余裕が出てきたことで、政府の財政政策にも景気を刺激するような姿勢が出てきた。高市政権は国内での投資を刺激することで日本経済の成長力を高めるような政策を推し進めようとしている。財政資金を利用して半導体などの産業を育成する動きにも積極的だ。

もちろん過度に財政支出を増やせば、財政リスクが表面化してしまう。市場は財政リスクに敏感になっており、国債利回り（長期金利）が上昇することを懸念している。高市政権は責任ある積極財政という表現を使っているが、「責任ある」ということと、「積極財政」のバランスが問われる。

## イラン紛争

穏やかなインフレが続けば、物価上昇と賃金上昇の好循環が続き、日本経済にも好ましい影響が及ぶ。株価などもそれを反映して好調な動きが続いていた。しかし、それは米国とイスラエルによるイラン攻撃が始まる前までのことだった。イラン紛争は世界経済を大きく変えようとしており、日本もその危機から逃れることはできない。

イラン紛争によってホルムズ海峡が実質的に閉鎖され、湾岸諸国の石油や天然

ガスの施設の破壊が進んだ。イラン戦争がいつまでどのような形で続くのか予想するのは難しい。ただ、世界の原油価格は大幅に上昇し、原油の供給にも大きな制約が起きている。

イラン戦争の経済への影響は、一言で言えばスタグフレーションの動きである。原油などの不足によって景気が悪化し、石油価格の高騰によってインフレが加速するのだ。物価上昇と景気減速が共存するスタグフレーションは厄介だ。物価上昇を抑えようとして金利を上げれば、景気をさらに悪化させる。景気を刺激しようとするれば物価上昇が加速化する。

1979年にイラン革命をきっかけとして第二次石油ショックが起き、日本は厳しいスタグフレーションに苦しんだ。今回のイラン戦争がそうした深刻な事態にまでいくのかは分からない。ただ、今回の石油危機がイラン問題から起きていることは気になるところだ。

スタグフレーションの流れが広がれば、インフレの悪い面が前面に出ることになる。物価上昇と賃金上昇の好循環などとは言っていられなくなる。インフレが加速化するようなことになれば、景気への悪影響を覚悟しても金利を上げていくことも必要となるだろう。

もちろん、まだスタグフレーションになっているわけではない。今の時点で過度に悲観的な議論はすべきではない。あまり悪い展開にならないことを願っている。

# けいざい風水



## 県立図書館

県民の学びと交流の中心

沖縄銀行 本店営業部 課長  
呉屋 春美

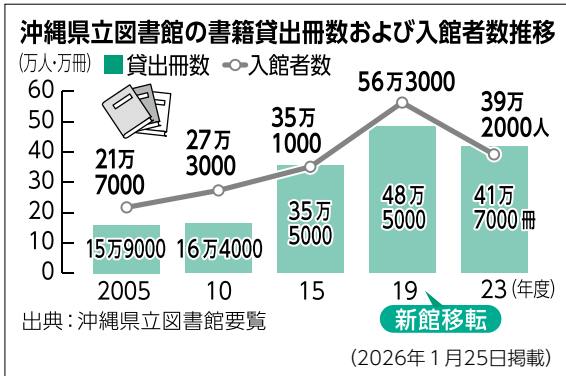
沖縄県立図書館は1910年に開館し、今年で116年を迎えます。沖縄戦で多くの書籍や重要資料が壊滅的な被害を受けましたが、戦後の復興とともに蔵書を増やし、幾度も移転を経て、県民の学びと交流の中心として確かな存在感を放っています。

現代の図書館は、かつての「本を借りる場所」とのイメージを大きく超えています。県立図書館も2019年に泉崎へ移転し、設備の充実や利便性の向上で利用者が増加しました。具体的にはオンライン利用者登録や座席の事前予約、遠隔地からの貸出・返却サービスなど、デジタル化が進んだことで、忙しい社会人や子育て世代、離島に住む方々にも利用しやすい環境が整っています。

館内に一歩踏み入ると、おしゃれなカフェのような落ち着いた空間が広がり、自然と読書や学習に集中できる雰囲気があります。しばらく図書館を利用してない方であれば、その進化ぶりにきっと驚かされるでしょう。

最低賃金の引き上げの一方で、物価高騰が続き、本を気軽に購入することが難しい状況です。そんな時代だからこそ、無料で利用できる公立図書館の役割はますます重要です。経済状況にかかわらず、誰もが同じように情報にアクセスできるという点で、図書館は社会を支える大切なインフラです。

家で動画配信サービスを主にしている皆さんも、ぜひ休日には最寄りの図書館へ足を運んでみてください。きっと新しい発見や視野の広がりがあるはずです。レッツゴー・ライブラリー。



## 政策金利引き上げの意味

コストプッシュ局面から次の段階へ

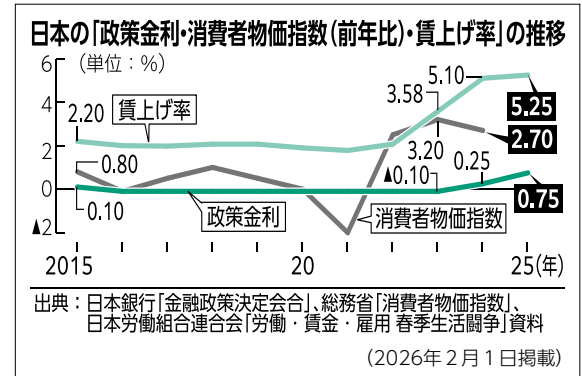
沖縄銀行 東京支店長  
砂川 恵太

日本銀行は金融緩和を修正し、政策金利の引き上げに踏み出しました。政策金利は「世の中の金利の出発点」で、日銀が短期金利（無担保コール翌日物）を一定水準に誘導することで住宅ローンや企業融資など幅広い金利に波及します。2025年12月の金融政策決定会合で、政策金利を0.5%から0.75%程度へ引き上げました。

一般的に利上げは需要の過熱を抑えるために行われますが、今回の物価上昇はエネルギーや輸入物価などコスト要因が大きい点が特徴です。実際、消費者物価指数（CPI・総合）は24年末から25年にかけて高めに推移している一方、政策金利の引き上げは段階的で「需要過熱への即時対応」一色ではないことがデータから読み取れます。

日銀は2%の「物価安定の目標」を「持続的かつ安定的」に達成するため、金融緩和の度合いを調整するとしています。鍵として「賃金と物価がともに緩やかに上昇を続けるメカニズム」を重視しています。賃上げの広がりやサービス価格も上昇傾向で、物価の“中身”が次の段階に移りつつある前向きな兆しです。

金利上昇は借入負担の増加を伴いますが、預金金利の改善や資金配分の正常化をもたらします。物価上昇局面では、現金の実質価値が目減りする可能性があり、預金金利だけでなく制度とリスクを理解した資産管理、すなわち金融リテラシーが鍵です。行政や金融機関の支援施策を活用し、この環境を前向きに捉えたい。政策金利引き上げは経済の次の段階を試す局面といえるでしょう。





## キャッシュレス促進

人手不足解消の一助に

おきぎんジェーシービー 営業統括部課長  
花城 真也

日本のキャッシュレス決済比率は2024年に42.8%に達しました。将来的に80%を目指していますが、他国では22年時点で韓国99%、中国83.5%で大きな差があります。背景に韓国では消費刺激・税収の透明化を目的として、キャッシュレスによる所得控除や加盟店への義務化が行われました。中国では政府による強力な後押し、偽札問題や高額紙幣が存在しない不便さもキャッシュレス普及の要因となっています。

一方、日本では現金の信頼性が高くATM網の充実による利便性もあり、キャッシュレス化が遅れてきましたが、観光・インバウンド対応や人手不足・業務効率化等を目的に取り組みが加速しています。沖縄県でも観光・インバウンド対応や高齢化・若年層の県外流出など課題があり、ニーズは高まっています。

例えば、北部地域や離島は観光需要があるものの、キャッシュレス浸透は十分ではなく、観光客への販売機会を逃している可能性が懸念されます。蓄積した決済データを活用し、国籍別の購買動向の分析など顧客と販売業者にメリットがあるようなマーケティング施策の定着が重要です。

様々な産業で人手不足が顕著です。キャッシュレス化推進でホテルでの顔認証チェックイン、無人店舗、ドローン配送などの導入が可能となり、人手不足解消の一助になることでしょう。これは、沖縄県の構造的な課題の緩和に一定の効果が期待できます。豊かな沖縄の未来を見据え、官民一体となりさらに加速させていくことが重要です。

### 社会的意義

既存の課題を解決する

- ◆消費者の利便性向上
- ◆現金決済に係るインフラコストの削減
- ◆業務効率化 / 人手不足対応
- ◆公衆衛生上の安心の実現
- ◆現金の保有や取引機会の減少による不正 / 犯罪抑止

新たな創造

- ◆データ連携・デジタル化
- ◆多様な消費スタイルを創造
- ◆脱炭素社会への貢献

出所：経済産業省「キャッシュレス推進検討会とりまとめ」資料より  
(2026年2月8日掲載)



## 県民の宝「オキちゃん」

引き継がれる功績 北部発展へ

沖縄銀行 本部支店長  
世永 広樹

別れは突然でした。本部町の沖縄美ら海水族館で、長年愛されてきたミナミバンドウイルカの「オキちゃん」(メス、推定52歳)が2025年12月2日に天国へ旅立ちました。同年で飼育50年を迎え、県民や来館者に最も愛された存在でした。

1975年、沖縄国際海洋博覧会の開催に合わせて「いるかの国」に登場。力強いジャンプや愛らしい仕草で県民をはじめ、多くの人々に笑顔を届け、半世紀にわたり沖縄観光の発展に大きく貢献してきました。

沖縄美ら海水族館は年間来館者数300万人超と国内水族館で最多を記録しています。2024年8月には累計入館者数6千万人を達成し、その成長は「オキちゃん」の活躍と共に歩んできました。

現在、沖縄県北部地域は転換期を迎えています。北部地域の入域者数は2023年436万人でしたが、2026年は549万人を目標としています。

その背景には沖縄美ら海水族館を中心とした既存観光スポットの認知度に加え、2025年7月の大型テーマパークの開業、本部港へのクルーズ船就航、交通インフラ整備といった要素があります。

また、北部地域はこれまで「日帰り観光」が主流でしたが、リゾートホテルの開発や民泊、グランピング施設が増加し、観光経済圏として発展し続けています。

沖縄観光の注目はいま北部地域に向けられています。私たちが愛した「オキちゃん」の功績を引き継ぎ、北部地域の発展のため、これからも共に歩んで行きたいと思えます。

